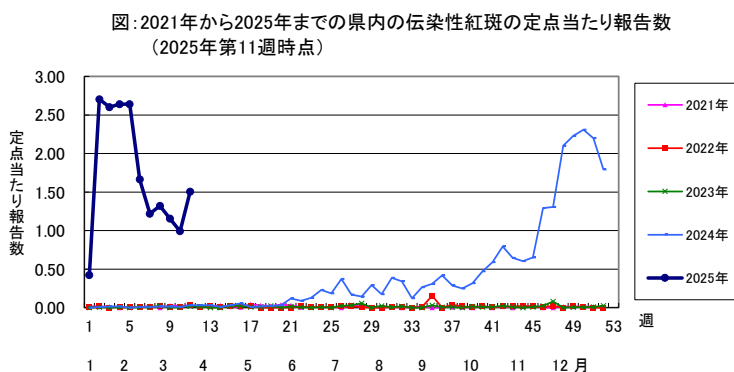


【今週の注目疾患】

《伝染性紅斑（りんご病）》

2025 年第 11 週における県内の小児科定点医療機関からの定点当たり報告数は、前週から増加し 1.50（人）となった（図）。保健所別では、海匝 3.00（人）、山武 2.75（人）、長生 2.50（人）が高かった。

現行感染症サーベイランスが開始された 1999 年以降で最も高い水準で推移していた第 5 週までと比較して減少こそしているが、依然例年より高い水準にあることから、注意が必要である。



本疾患はヒトパルボウイルス B19 を原因とし、幼児、学童の小児を中心にみられる流行性の発疹性疾患であり、「リンゴ（ほっぺ）病」と呼ばれることもある。

特徴的な症状は、感染後 10 日から 20 日の潜伏期間を経て出現する両頬の境界鮮明な紅斑である。続いて腕、脚部にも両側性に網目状・レース様の発疹がみられ、体幹部（胸腹背部）にもこの発疹が出現することがある。感染後約 1 週間頃にウイルス血症をおこしており、この時期にウイルスの体外への排泄量は最も多くなる。また、インフルエンザ様症状（倦怠、発熱、筋肉痛、鼻汁、頭痛、掻痒症など）を呈することがあるが、発熱はあっても軽度である。なお、発疹出現時期を迎えて伝染性紅斑と臨床的に診断された時点は抗体を産生する頃であり、ウイルス血症はほぼ終息し、既に周囲への感染性はほとんどないといわれている。発疹は 1 週間前後で消失するが、一度消えた発疹が短期間のうちに日光や熱（運動や入浴など）により再出現することがある。成人では両頬の蝶形紅斑は少ない。本疾患の約 4 分の 1 は不顕性感染である¹⁾。

注意すべきこととして、妊婦から胎児に垂直感染し、流産や死産、胎児水腫を起こすことがあるが、伝染性紅斑を発症した妊婦から出生し、ヒトパルボウイルス B19 感染が確認された新生児でも、妊娠分娩の経過が正常で、出生後の発育も正常であることが多く、生存児での先天異常は知られていない。

また、鎌状赤血球症などの溶血性貧血患者では貧血発作（aplastic crisis）を、免疫不全者では重症で慢性的な貧血を引き起こす場合がある^{1,2)}。

感染経路は飛沫感染もしくは接触感染である。職場、子供の保育園・学校等の周囲で患者発生が見られる場合、特に妊娠中またはその可能性のある方は、感冒様症状を呈する人との接触を可能な限り避けるよう、注意が必要である。また、手指衛生、咳エチケット等の一般的な衛生対策や体調不良時は自宅で安静にすること等、うつらない・うつさない予防対策が重要である^{1,2)}。

■参考・引用

1) 国立感染症研究所：IDWR 2019 年第 14 号＜注目すべき感染症＞伝染性紅斑（ヒトパルボウイルス B19 感染症）

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/5th-disease-m/5th-disease-idwrc/8749-idwrc-1914.html>

2) 国立感染症研究所：伝染性紅斑とは

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/443-5th-disease.html>

【TOPICS】

麻疹（はしか）患者の発生について

柏市と東京都から、千葉県が報道発表した麻疹患者と接触歴のある患者について、報道発表がありました¹⁻³⁾。

第 11 週時点における県内の患者は 2 例となりました。

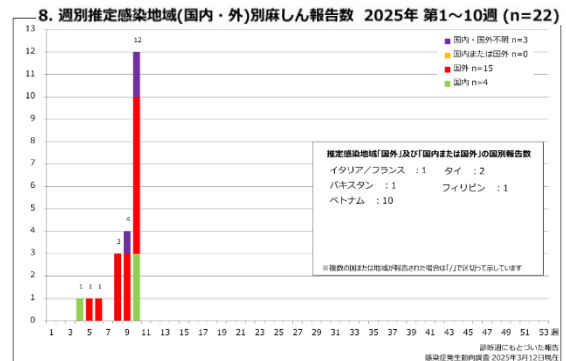
当該患者が他の人に麻疹を感染させてしまう可能性がある期間に利用していた施設を同じ時間帯に利用された方で、利用後 10 日前後経ってから、発熱や発しん等、麻疹を疑うような症状が現れた場合、事前に最寄りの保健所に電話連絡し、指示に従い、医療機関を受診してください。

また、受診の際は、周囲への感染拡大を防ぐため、公共交通機関等の利用を避けてください¹⁾。

○国内での発生状況

国立感染症研究所のまとめによると、2025 年は第 10 週に 12 例の届出があり、累計 22 例となりました。近隣都県では、これまでに神奈川県で 4 例、東京都及び茨城県で各 1 例の届出がありました⁴⁾。

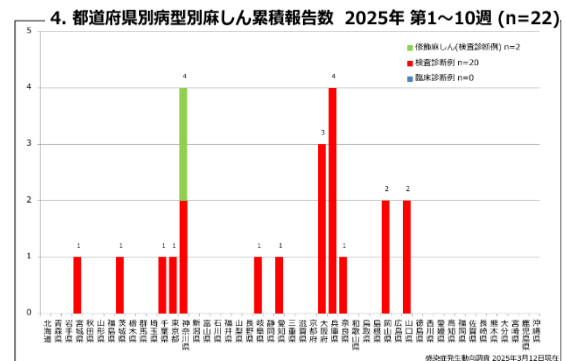
※図は、国立感染症研究所の公表資料から転載。



○症状

感染すると通常 10 日から 12 日後に 38℃前後の発熱、咳、鼻汁、くしゃみ、結膜充血などが約 2 日から 4 日間続き、解熱後、再び 39℃以上の高熱と発しんが出現します。

肺炎、中耳炎を合併しやすく、患者 1,000 人に 1 人の割合で脳炎を発症と言われています。また、死亡する割合は、先進国でも 1,000 人に 1 人と言われています¹⁾。



※CDC（米国疾病予防管理センター）の報告において、2025 年（3 月 13 日時点）は、患者は 301 名、うち 50 名（17%）が入院、2 名の死亡が確認されています⁵⁾。

○予防

麻疹は感染力が強く、空気感染もするので、手洗い、マスクのみでは予防できません。予防接種が最も有効なため、2 回の定期接種を必ず受けましょう。

※母子手帳などで予防接種歴を確認し、2 回受けていない方や予防接種歴が不明な方は、かかりつけ医などに相談の上、接種を検討してください¹⁾。

■参考・引用

- 1) 千葉県健康福祉部疾病対策課：麻疹（はしか）患者の発生について（第 2 報）
<https://www.pref.chiba.lg.jp/shippei/press/2024/measle0313.html>
- 2) 柏市健康医療部保健予防課：麻疹（はしか）患者の発生について（令和 7 年 3 月 17 日発表）
<https://www.city.kashiwa.lg.jp/koho/pressrelease/r6houdou/3gatsu/r7031703.html>
- 3) 東京都保健医療局：麻疹（はしか）患者の発生について
<https://www.hokeniryo.metro.tokyo.lg.jp/information/press/2024/03/kansen202503171700>
- 4) 国立感染症研究所：麻疹（発生動向調査）
<https://www.niid.go.jp/niid/images/idsc/disease/measles/2025pdf/meas25-10.pdf>
- 5) CDC : Measles Cases and Outbreaks
<https://www.cdc.gov/measles/data-research/index.html>